

B-8 「近現代のアジアと日本」

(1) 科目の紹介

基本情報	平成 26 年度・教養教育・後期	曜日・校時	火 1 限
モジュール名	世界を知り、日本を知る	科目名	近現代のアジアと日本
教員名(所属)	コンペル ラドミール(多文化社会学部)		教室 G-3A
選択者数	90名	1年生の所属学部	教育学部 経済学部 薬学部 水産学部
再履修数	0名		(45名) (35名) (7名) (3名)
<p>授業のねらい：沖縄、日本、アジア、世界といった空間軸の間で視野を柔軟に調整しつつ、政治、経済、法制度、社会、歴史、文化などの視点から世界と日本を考察することによって、多様な他者と同時に多様な自己をも理解することをめざす。そこからグローバル化にともなって生じている様々な多文化状況に適応する素養と思考力を身につけることが本授業の目標である。</p>			
<p>アクティブラーニングに向けて工夫した点：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・受講生を大学図書館を案内し、授業の内容に関連する文献調査を実施した。 ・90名の学生を9つのグループに分けて、グループ別に課題を与えた。 ・3種類のグループディスカッションの機会を与えた：(1)小規模[10回]、(2)大規模[2回]、各一班の発表[9回]。 ・(1)小規模のディスカッションでは、授業の主要な要点について討論させた。 ・(2)大規模のグループワークでは予め発表を準備させ、小規模ディスカッションより更に積極的な参加を促した。 ・(3)各グループの発表時に、グループ内10人に個別の課題を与え、授業の進行上の共通性を確保しながら学生全員で取り組む課題は重複しないように気を付けた。 			

(2) 学修の評価

到達目標	<p>①沖縄と日本の近現代史、アジアの国際関係における位置づけについての概略を説明できるようになる。</p> <p>②身の回りの事象について、その歴史的な背景や社会の仕組みを考えて物事を見るようになる。</p> <p>③社会の多様性について、「他者を理解し、自己を省みると同時に相対化する」ことができるようになる。</p>
成績評価の方法	<p>①授業への積極的な参加、発表、グループワーク 45%</p> <p>②期末試験・レポート 55%</p>

(3) 授業の進行

概要：沖縄という地域の特殊性を手がかりに、日本をはじめ東アジアの近現代史の形成をひもとく。アジアにおける国民国家の形成と変容への理解を深め、現代社会の仕組みについて洞察力を鍛える。

回	学習内容	授業方法（講義、グループワーク、プレゼンなど）
1	オリエンテーション	講義 60%、議論 20%、グループ形成 20%
2	文献調査及び小プレゼンテーション①	個別発表 80%、グループ討論 20%
3	文献調査及び小プレゼンテーション②	個別発表 80%、グループ討論 20%
4	先史時代および古琉球の世界	講義 70%、グループ①発表 15%、小グループワーク 15%
5	近世から明治時代までの沖縄	講義 70%、グループ②発表 15%、小グループワーク 15%
6	大正・昭和期の沖縄	講義 70%、グループ③発表 15%、小グループワーク 15%
7	グループワーク① 沖縄戦の記憶	グループワーク 80%、討論 20%
8	沖縄戦	講義 80%、グループ④発表 10%、小グループワーク 10%
9	戦後初期の沖縄	講義 85%、グループ⑤発表 5%、小グループワーク 10%
10	講和前後の沖縄	講義 90%、グループ⑥発表 5%、小グループワーク 5%
11	土地問題と復帰運動	講義 95%、グループ⑦発表 5%
12	「一体化」の時代	講義 90%、グループ⑧発表 5%、小グループワーク 5%
13	グループワーク② 今日の沖縄	グループワーク 93%、討論 7%

14	返還後の沖縄	講義 90%、グループ⑨発表 5%、小グループワーク 5%
15	グローバル化時代の地域アイデンティティ	講義 70%、グループワーク 30%

(4) 授業の成果

全体の総括	授業毎の小規模グループディスカッションを実施するに、想定したよりも時間を要し、容易ではない。ディスカッションの時間を確保するために講義の教材を割愛しなければいけなかったのが反省点である。学生は少ない時間しか与えられていない場合、グループ内の議論は深まらず、表面的な回答になってしまう。また、受講者全員が予め参考文献（10 頁程度）を読んでくることを前提としていたが、10 コマ以上の履修登録者も多く、予習の負担が大きいことが判明した。
今後の改善点	<ol style="list-style-type: none"> 1. 小規模グループディスカッションの頻度を減らす方向で検討している。 2. 授業毎に一つのグループに、参考文献について発表やコメントをする時間を増やす方向で検討している。この形式のグループワークでは授業のテーマに関する担当者が責任を持ち、議論も深まったためである。

学生の発表ファイルを収集するのに LACS が欠かせないシステムですので、学生に LACS の機能についてさらに認識を深める必要があることが分かった。グループワークは初めての経験だったが、様々な形式を試みて、メリットとデメリットについて少しずつ把握するようになった。教員も学生も準備は多いので、よりやりやすい方法についてこれからも検討していきたい。

(5) アクティブ・ラーニングの充実にに向けた提案

ポイント提案	<ul style="list-style-type: none"> ・学生が積極的に授業に参加するにはある程度の予習は不可欠であり、履修のコマ数が多いとグループワークは表面的になりがちである。 ・各グループおよび個人に個別の課題を与えることにより、学生の考える力を鍛え、グループワークにありがちな同調性、回答の回避の同一化傾向をある程度予防できる。
参考になる資料	